



感動発掘・発信インタビュー
『あなたのところをうごかす、おしえてください』
—#11 藤川 靖彦さん—



「感動価値をひろめよう」というミッションから、様々な“ヒト”の『感動』を取材し、皆さまにお届けするシリーズ企画『あなたのところをうごかす、おしえてください』の第11回目です。
今回は、限りある命 (Ephemeral) をテーマに、花やキャンドルを使ったエフェメラル・アーティストの藤川靖彦さんです。大地に花びらで描く花絵「インフィオラータ」の日本の第一人者で、現在国際連盟の理事も務めています。またローマ法王主催による特別ミサにVIPとして招かれ、国内はもとより、イタリア・スペイン・韓国を中心に、国際的な創作活動を行っています。
人々を感動させることが大好きな藤川さんのお話を、是非ご一読ください。

藤川 靖彦 (ふじかわ やすひこ)

エフェメラル・アーティスト

1961年4月、東京都世田谷区生まれ。日本大学芸術学部演劇学科卒業。

株式会社インフィオラータ・アソシエイツ 代表取締役社長 <http://www.infiolata88.com/>

Comision Gestora Internacional de Entidades de Alfombristas de Arte Efimero 理事

エンジン01文化戦略会議会員

2012年9月、スペイン・バルセロナで開催されたエフェメラル・アートの世界大会「Congres Internacinal d'Art Efimer」において、日本代表として招かれ江戸錦絵を「インフィオラータ」で再現、大きな話題を呼んだ。

2012年3月11日、宮城県石巻市を流れる北上川の中州に、10,000本のバラと、10,000個のキャンドルで、東日本大震災被災者に向けた追悼アート「桜灯2012」を、石巻市民とともに創作。

2013年5月、「インフィオラータ」の本場イタリア・ノート市より招かれ、「日本へのオマージュ」をテーマに8枚の作品を創作するとともに、様々なコンテンツミックスにより“日本”をプロデュース。ノート市史上最高の観衆を集め表彰を受ける。

2014年6月、パチカンで開催されたエフェメラルアートの世界大会「Congresso internazionale dei tappeti d'arte effimera」において、日本代表として招かれ、「花歌舞伎」と題した壮大な歌舞伎絵のインフィオラータを、サンピエトロ寺院前に創作。世界中のメディアが絶賛した。また同国際会議において議長を務める。

また、かねてから推奨していた、離島における「バカンス型SOHOスタイル」を实践すべく、八丈島にアトリエを開設。大自然に囲まれながら、健康的且つ効率的なビジネスライフをおくるとともに、年に1~2回 大好きなアフリカのサバンナを訪ね、マサイ族との交流や野生動物たちの撮影を行っている。

イタリア伝統の「インフィオラータ」に 新風を巻き起こす「花絵師」

イベントプロデューサーとして出会った 大地に花で描く絵「インフィオラータ」



—— 藤川さんは、花やキャンドルを使ったエフェメラルアート(※1)の第一人者でいらっしゃいます。特に大地をキャンバスに描く花絵「インフィオラータ」では、海外でも高い評価を得ていらっしゃいますが現在の仕事をされるようになった経緯を教えてください。

もともと僕はイベントの企画とかプロデュースをやっていました。2001年にトリトスクウェアという、東京晴海の都市再開発がありまして、その開業に向けた総合プロデュースを手がけていたんですね。

その仕事の中で、新しい街には新旧住人がひとつになれる何かお祭りが必要だと考えて、色々と企画を探しているときに、「インフィオラータ」というヨーロッパを中心に行われている花のお祭りが

目に付いたんです。これはいいと思って、すぐにインフィオラータの本場イタリアへ飛び、現地の協力を得て始めたわけです。

当初はインフィオラータで、今みたいなアート作品を作って行こう、と考えたわけではなく、ただイベントのひとつのコンテンツとして考えていました。

それが、メディアで紹介していただくようになり、年々色々なところからオファーが来るようになるにつれ、イタリアの力を借りず、自分達の力だけで日本オリジナルなものを作るようになったんです。



200mの参道を花びらのカーペットで覆う「インフィオラータ」

(※1) “限りある生命”という意味の英語 {Ephemeral (エフェメラル)} をテーマに、花やキャンドルを使ったアート

一度でとりこになった八丈島。迷わず移住し、会社を設立

—— お住まいも経営されている会社の本社も八丈島ということですが、どういういきさつでそうなったのですか？

2003年に、たまたまアートディレクターの浅葉克己さんに誘われて八丈島へ行ったのがそもそもの始まりです。その時、八丈島空港に降りた瞬間に、「わーっ！ここに住もう！」と思って、その場で移住を決めたんですよ。空港ゲートを出たらいきなり目の前に八丈富士がどーんとあって、真っ青な空で、パームツリーが立っていて、ハイビスカスが咲いてて。いかにも南国の雰囲気完璧に魅せられました。

それで、一週間後には八丈島で家探しを始めちゃった。結局、八丈島移住は2005年の1月に実現しました。当初は、八丈島でまったく新しい暮らしをしようと思っていたんですよ。月に企画書1本くらいの仕事をもらって、足りないときはアルバイトでもやって暮らそうかなあって。それまでお付き合いのあった広告代理店の方には「仕事も順調なのに、なんでそんな所へ行くの。もう仕事を出せなくなるよ」って散々脅かされたんですが、僕としてはもう行こうと決めていたので、迷わず引越しました。

ところがね、八丈島へ行くと仕事の効率が格段によくなるんですよ。まず打ち合わせにとられていた時間がなくなるでしょ。移動の時間もなくなる。電話もそんなにかかかってこない。24時間すべて自分の時間になるわけですよ。したがって驚くほど作業が進むんです。例えばそれまで一週間かかった企画書が、2～3日でできちゃう。だから、お客さんにしてみればすごくありがたいわけですね。そんなことで、かえて仕事の依頼が増えちゃった(笑)。



八丈島の自宅にて



八丈富士とフリージア畑

—— そして、八丈島で会社を設立されることになるんですね。

島に移住して1年後くらいかな、もともと取引があった企業の社長さん達に「インフィオラータをこのままにしておくのはもったいない。インフィオラータで何かをやっていく会社を作ったらどうだ」と薦められて、自分達が出資するというお話までいただいたんです。じゃあ会社を立ち上げようということになって、島に何か貢献したいという想いがあったので、本社を八丈島において「株式会社インフィオラータ・アソシエイツ」がスタートしました。そのうち仕事も増えて自分ひとりではやっていけなくなったので、東京に事務所を開いて社員も増やし、現在のような形になりました。本社は八丈島なんですけど、どちらかというところらはアトリエ的な場にして、実務は東京です。僕は八丈島と東京を行ったり来たり、そんな感じでやっています。

壮大なクリスマスイルミネーション

—— 藤川さんが2000年に手がけられたイルミネーションアート「1万本のメリークリスマス」がその年のテレビ局が選ぶ最も美しいクリスマスイルミネーションに選ばれました。その作品についてお聞かせください。

これはね、今から思うとインフィオラータの前身なんですよ。インフィオラータもキャンドルアートも、基本的に僕がやっているのはドットアートなんです。この「1万本のメリークリスマス」はドットアートの典型ですね。トリトスクウェアには200メートル級の超高層ビルが3棟あります。その外壁のうち9面が外側を向いているんですよ。残り3面はビル同士向かい合って中側を向いている。

その9面をそれぞれのキャンバスに見立てて、9面の200メートル級の光のオブジェを作ったんです。ビルの窓辺に家庭用のクリスマスツリーを置いて、そこに家庭用のイルミネーションを巻いて、その明かりで巨大なひとつのアートが出来上がりました。超高層ならではの特色を出しつつ、PRイベントとしての話題性も欲しかったので、とにかくデカイ、壮大なものにしたかった。



高層ビルの窓を彩る「1万本のメリークリスマス」

市民2,000人と描き、50万人の心を捉えた、横浜開港絵

—— 横浜開港150周年のイベントに際しては、インフィオラータの壮大な絵巻が日本大通りを飾ったわけですが、この創作について聞かせてください。

これは、横浜開港150年祭のときに、横浜市の道路局が日本大通りを埋め尽くしてインフィオラータをやりたいという企画を自分達で作ったんです。そこでプロデュースを依頼されたという形です。原画は開港絵にしました。錦絵です。そういう部分では、今僕のやっている花歌舞伎の原型は、ここにあった感じですよ。あのイベントは、何から何まで規模が大きかった。

市民2,000人を募って35万本の花をむしった。パシフィック横浜の展示場を全部使って、2,000人で花をむしったんです。それを持って日本大通りに移動して、みんなで花絵を作りました。

——これもメディアにもかなり取り上げられましたね。

すごかったですよ。大きな広告は打っていなかったんだけど、2日間で50万人以上が来ました。開港祭のイベントの中では、一番成功した企画だったと横浜市の担当者が言っていました。ただ残念なのは、それ一回で終わってしまっていることです。

市民の参加があって、みんなが喜んでくれたものをお祭りだけで終わらせるのじゃなくてね、それを継続していくことで横浜の文化になるわけじゃないですか。ところがそれを一回きりで終わらせている。もったいないですよ。



人々で賑わう横浜開港150年祭でのインフィオラータ

被災者を花で支援する活動「フラワーズエール」

——さて、東日本大震災では、フラワーズエールという形で復興支援の活動を精力的に展開されましたね。

震災が起きて、東京にいる僕達は被災地の様子を毎日テレビで見ているわけですよ。避難所とか病院とかいろんな所が紹介されるんだけど、そこに花が一輪もないことに気づいたんです。何でもみんな花を贈らないんだろうと思ったら、実は花の市場が津波で全部流されちゃっていたんです。花の流通がないわけですよ。

これは何とかしたい、「そうだ、僕達は花を贈ろう」と考えたんです。震災で死を直面した人達に、花がだんだん咲いて行くという、生の部分を感じてもらいたいと思って。そこでインフィオラータなどを通じて全国から募金を募り、それを資金に花を買って、みんなの気持ちを一緒に持って東北へ行こうと。それで、フラワーズエールというのを立ち上げたんです。

この活動も、色々ところでやりました。去年は、伊豆大島に台風で相当な被害がありましたね。同じ島民ということで八丈島からフリージアを1万本位もらって、それを持って大島に行きました。大島では作品を作るような活動もして。フラワーズエールは、別に東日本大震災に限ったことではなくて、これからも国内外を問わず色々な活動をしていきたいなあと考えています。



フラワーズエール二本松



フラワーズエール気仙沼

バチカンに招かれて創作 インフィオラータ誕生の地で絶賛された「花歌舞伎」

——2014年バチカンで開かれたエフェメラルアートの世界大会では、日本代表として招待され「花歌舞伎」と題した作品を創作されました。そのときのお話をお聞かせください。

日頃から僕は自分の作品をfacebookに上げたりしているんですけど、それをたまたまイタリアの連中が見たんですね。彼らの情報網で「日本にこんな奴がいるぞ」という話が広まって、それが国際連盟の会長にも伝わったらしいんです。

それで、2012年にバルセロナで開かれたインフィオラータの国際大会に、ぜひ招待したいという話をもらったんです。周りにはイタリアはもちろん、メキシコとかスペインとかすごい連中が集まっているわけですよ。その中で見劣りするものは作れないので、それで選んだのが歌舞伎絵だったんです。それがすごい評価を得て、メディアにもたくさん取り上げられました。そこで海外でも一気に認められるようになったんです。

その2年後には、バチカンでローマ大会がありました。インフィオラータというのは、サンピエトロ寺院で400年前に作られたのが始まりなんですよ。そんなことで世界中のアーティストが、サンピエトロに集まって作品を作って、ローマ法王に献上するという形で、世界大会が行われたんです。

僕は、そのときに何故か理事に昇格させられて、さらに国際大会議長みたいなことを任命されたんですよ。ローマからサンピエトロ寺院につながる道と、サンピエトロ広場の回りを使って、だいたい約50カ国地域から集まってきて、50枚の作品を作りました。

その大会の中で大会議長ということもあって、ローマ法王から年に一度ある特別なミサに招いていただいたんです。聖堂の真ん中にレッドカーペットがびーんとあって、バチカンの大臣とか偉い方がモーニングを着て立っている。僕らはそこを歩いて特別席につき、法王の一番間近でミサに参列したんです。あれはね、僕なんかキリスト教の人間じゃないけど、感激しましたね。

次の世界大会は、来年イタリアのシチリアで開かれます。僕らも参加をするんですが、ちょうど来年は日本とイタリアの友好150周年なので、そこからめて日本をフィーチャーしたものがないかなあ、と考えているところです。



バチカンにて



バチカンで制作した「花歌舞伎」

————— 後発の日本から世界の代表に選ばれるのは、大変なことだと思います。

正直インフィオラータがヨーロッパで100年続いたといっても、彼らは1年に1回しかやらないから、100回しかやってないわけですよ。100年生きてる人はいないからね、どんなにやったってね40年間に40回とか。

僕は2012年に始めて行ったんだけど、その時点でもう100何十回とやっていたから、彼らの100何十年分のキャリアなわけですよ。だから僕はボクシングでいうと南米のボクサータイプ(笑)。1週間に何試合もやって力をつけていくみたいだね、そういうやり方をしてきたんです。

感動に出会うために通い続ける、アフリカサバンナ

——藤川さんの活動は実に多彩で、今年1月にアフリカをテーマにした「SAVANNA HOT-LINE」という写真展を開かれました。何度も行かれているアフリカの魅力や、この個展にまつわるお話を聞かせてください。

アフリカはね、子供の頃からサバンナやマサイ族にすごい興味があったんですよ。マサイ族というのはカラーコーディネートの原点だと思いますね。彼らの色に対する美意識はすごい。

それから、動物たちが自然の状態であんな昔からいるわけで、そこにも魅力を感じていて、行くのが夢だったんです。

最初に行ったのは、2007年のタンザニア。その後はずっとケニアに通っています。

アフリカは本当に魅力的で、何ていうのかな 中毒になっちゃう。毎年1～2回は必ず行っています。必ず写真を撮ってくるので、それが3万枚くらいたまっていました。そこで友達におだてられて、個展をやろうということになったんです。ついでに写真集も作った。

どうせやるなら何かアートとして作品化したいなぁと思い、人間国宝の方の手漉きの和紙にプリントしました。和紙の毛羽立った雰囲気や動物の毛並みとリンクさせて、立体感と臨場感を表現をしたんです。

色もカラーだとイメージを固定しちゃうので、セピアにして、見た人達が自分なりにカラーリングしてサバンナをイメージしてもらえればいいかなと思って。マサイ族だけは、色を見せたかったのでカラーにして、全部で40点くらいの作品を展示しました。



個展「SAVANNA HOT-LINE」作品より



個展「SAVANNA HOT-LINE」会場風景



個展「SAVANNA HOT-LINE」の会場にて

—— 藤川さんのアフリカ行きは、今後も続くわけですね。

アフリカは僕の永遠のテーマですね。年に1回は行って、心の洗濯をしたいなあ。こっちにずっといると、だんだん固定概念みたいなものが溜まってくる。ああいう自然の中に入って一回心をきれいに洗って戻ってくると、また新しい発想がね、出てくるから。まず自分が感動しないと、人を感動させるものは作れないと思うんです。

サバンナは同じシーンというのが絶対に見られないんですよ。たとえば今ここにライオンがいたからといって、一時間後もいるかという、そうはいかない。だから毎日毎日がドキドキするんです。まさにサバンナは感動の宝箱。僕にとって、サバンナは一番ドキドキできる場所ですね。

テレビ「情熱大陸」出演を期に、「花絵師」を名乗ることに

—— 先日TBSの「情熱大陸」に出演されました。そもそも出演されたきっかけや取材の様子、周りの反応などをお聞かせください。

情熱大陸に限らずああいುದキュメンタリー番組には、何十という制作会社のディレクターが、こんなのでしょうかって テレビ局側にプレゼンするわけですよ。僕はたまたまその候補の一人だったんですが、プロデューサーの即決でやろうということに決まった。

それで、4月の中旬くらいから撮影が始まったんです。スペインでやるインフィオラータの大会に僕が招待されたところを中心に、その間に僕の人間性的な部分を撮って行きたいということで、密着取材が始まりました。

最初はたいしたことなかったんだけど、だんだん密着度がエスカレートして行って、サウナの中まで入ってくるし、トイレの中までついてくる。プールで泳いでいると潜って撮影してるんだから。何を撮ってるんだ、というくらい密着されましたよ。でも、放送を見てると30分はあっという間でしたね。もっと見せたいものがあつたし、もっと言いたいことがあつたのに、って。欲が出ちゃうんだなあ。



情熱大陸の撮影風景

—— 番組では藤川さんは「花絵師」と紹介されていましたが、これは誰の発案ですか？

はじめ、どういう肩書きで紹介しようかという話だったんです。インフィオラータマエストロ、またはフェデラルアーティストとかね。でも、そう言ったってわからないでしょ。それで、以前僕がイタリアへ行ったときに、在イタリア日本大使館の公使が、僕の紹介文に花絵作家と書いてくれたのを思い出して、「花絵師ってどうでしょうか？」といったら一発OKになり、番組で使われたんです。だから今、僕の肩書きは「花絵師」(笑)。



スペインで「花歌舞伎」を制作中の藤川氏

生涯最高の感動体験。シチリアのキャンドルアート

——— これまでのお仕事で感動したエピソードはありますか？

2005年ぐらいに、ネットであるアートを見つけたんですよ。市民アートなんだけど。これはぜひ直に見てみたいと思った。それはね、ラ・スカラ・イルミナータといって、階段のキャンドルアートなんですよ。

シチリアのカルタジオーネというところで、毎年夏にやっているお祭りで、幅10mぐらいで140段の階段にキャンドルをどーっと置いていって、それに火を灯してひとつの大きな灯り絵を作るんですね。

これがすばらしいんですよ。ぜひ見たくて、2010年に初めてカルタジオーネに行きました。昼間から準備をして夜一般市民が火をつけるんです。

階段に2,000人ぐらいの市民がいて、みんな細い棒を持って、それでキャンドルに火を灯していくんです。キャンドルといっても、オリーブオイルに太い芯がさしてあるだけ。本当に簡単なもの。回りは紙で、だいたい赤白緑3色に塗ってあるんです。

その様子を僕は離れたところで見ていたんですが、やがてキャンドルに火をつけ終わった人が横に流れていって、階段を下にさがってくるでしょ。そうすると、だんだん絵が見えてくるんです。その絵の美しさというのが、今まで見たものの中で一番きれいだった！ そして、灯りだから揺らぐでしょ。それはもう、涙が出てくるぐらい美しい。本当に感動しました。一生忘れられない。



シチリアのキャンドルアート「ラ・スカラ・イルミナータ」

—— ご自身でもやられましたね

西武園ゆうえんちの階段でやりました。あれは、幅5mの70段。それでもすごいインパクトがあったんですよ。あれも日本初ですね。いい階段があればもっとやりたいんですけどね。



西武園ゆうえんちのキャンドルアート「ステラ・フォレスターレ」

みんなで感動をわかちあえる、市民アートのすばらしさ

—— 実に多彩な活動をされていますが、それを可能にしている要因は何ですか？

“諦めが悪い”ことでしょうね。やろうと思ったことは、やりとおしたい。諦めたら終わりですからね。企画を立てるのも、手を抜こうと思えばいくらでもできるんだけど、それをやったら、自分に対して負け。自分に勝てない奴が、競合に勝てるわけがない。だから僕は、すごく“諦めが悪い”。



—— その“諦めの悪さ”はどこから来ているのでしょうか。

妥協したくないんですよ。インフィオラータだって、手を抜くことができるかもしれない。だけどそれをやると、出来上がったときにきっと後悔すると思うんです。完成してから、ああすればよかった、もっとこうやっておけばよかったと後悔しても、もう遅い。出来上がったときに満足感がないのはいやなんです。そのために妥協したくない。それが“諦めの悪さ”につながっていくんだと思います。

—— 藤川さんが思う“豊かさ”とは何でしょうか？

やっぱり感動するということだと思いますよ。僕なんかサバンナもそうだけど、感動することによって心が豊かになっていくし、心が広がっていく気がするんですよ。

豊かさというのはもちろん心の豊かさであって、経済的な豊かさじゃないですよ。いくら経済が豊かでもね、心が豊かじゃなかったら貧しい。心の豊かさは、どれだけたくさん感動を味わっているかですよ。

どんなに小さいことにでも感動できるような、豊かな心を持てるということが、一番必要なんだと思います。



完成した「花歌舞伎」の前で制作スタッフと記念撮影

—— 藤川さんが心を動かされたモノとかコトは？

アートは二つに分類できて、アーティストが孤独の中で作り上げるアートと、もうひとつは市民と一緒に作り上げるアートがあると思うんですね。僕は市民アートというのに対して、心を動かされているわけですよ。市民アートという、インフィオラータもそうですけど、ひとつの絵に何十人も参加して作ります。その中には子供もいればシルバーの方もいます。

みんな作っている時は、自分のパートがどういう風になっていくかわからない。でも、それがだんだん出来上がってきて、最後にぱっと上から見ると、ひとつの大きな作品が完成していて、みんなが感動するわけですね。

みんなが一生懸命作って、さらに出来上がって一緒に感動している。そして、見に来た人たちが写真を撮って、SNSに上げたり、または新聞やテレビに出たりとか、そこでまた喜ぶわけですよ。みんなで感動と充実感が味わえるんです。

この市民アートという一連のシステムに僕は、すごく心を動かされるし、今後も自分の中で大切なテーマとしてやっていきたいと思います。自分が作るアートというよりも、みんなで一緒に感動を形成する。海外で作った花歌舞伎だって、決して僕一人で作ったわけじゃなくて、うちのスタッフの他、現地のスタッフも入って作るわけですね。当然言葉は通じない。だけど何か作っていくうちに、通じ合うものがあるわけですよ。

そして、出来上がったときにみんな同じ感動というか、拍手でワーッと終わる。涙を流している。そういうところがね、僕にはすごく満足感があるし、やっていてよかったなと思う。そこに一番心が動かされますね。

—— 藤川さんがずっと提唱されている街・人・文化とつながっていますね。



そうですね、街・人・文化というのは街に文化を作っていくよ、ということ。それには当然、街の人達自らが動かなければ作れないわけですよ。

その街の人たちがモノを起こし、コトを起こす。それによって回りからも人が集まってくる。すると、そこに街の文化が生まれてくるんです。

だからそこに絶対なくちゃいけないのは、継続していくということ。単発で終われば、ただのイベントだし、継続していくことによってどんどんそれが育って、街の文化になっていく。そういうところが、僕が今一番提唱しているというか、作って行きたいことですね。

—— 最後に、藤川さんにとって、感動を一言でいうと、どうなりますか？

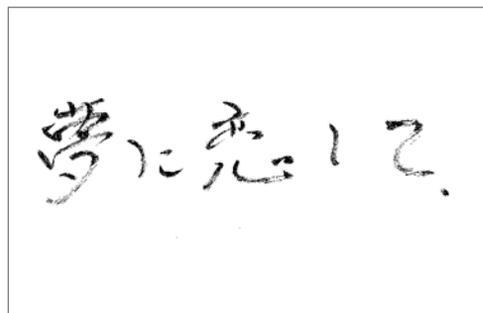
以前あるテレビ番組で同じようなことを言われて、その時書いたのは、「夢に恋して」。夢に恋しないと新しい発想も出てこないし、目標も出てこない。目標もなし発想もなしといたら、感動もない。

そういう意味で、僕の中では常に、「夢に恋して」ですね。女性に恋をするのと同じで、夢というのもどうやって口説こうか、どうやってこの夢を自分のものにするかってことを考える。それって結構自分の中で活力になるんだと思う。

活力がないと、どんどん老けちゃうし保守的になってくる。だから常に恋をしなくちゃいけない。だから夢に恋をして常にそいつを口説いてる、ものにするための試行錯誤をして。

だから「夢に恋して」でいきましょう！

感動とは…



-----インタビュー後記-----

世間の男なら少し照れくさいと思うようなことも、純粹に言葉にして真正面から想いをぶつけ、そして周りの人たちを仲間にして、皆と一緒に感動の渦を作っていく。そんな藤川さんだからこそ、ローマ法王から年に一度の特別なミサに、VIP招待されたことにもうなづけます。美しいモノ、素晴らしいモノがあると、世界中のどこへでも飛んでいく。そんな行動力で、パッと周りを明るく照らす情熱とクリエイティビティーを發揮する姿は、アーティストを超えて、＜感動の伝道師＞と言えるかもしれません。次の新しい「作品」でどんな「感動」をあたえてくれるのか、楽しみでなりません！